

歴博 くらしの植物苑だより

くらしの植物苑観察会 会場：くらしの植物苑 東屋 時間：13:30～

第128回 11月28日(土)『菊の栽培書』 講師：平野 恵先生

第129回 12月5日(土)『サザンカの楽しみ方』 講師：箱田 直紀先生

今週のみどころ <http://www.rekihaku.ac.jp>

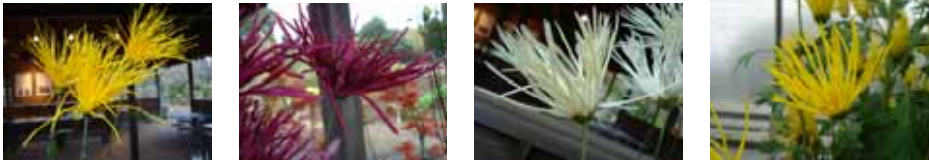
伝統の古典菊 開催中！！

展示期間：11月3日(火)～11月29日(日)



菊は、日本を代表する伝統的な園芸植物の1つです。日本自生の植物と考えがちですが、中国を原産地としており、古くからさまざまな系統が何度も日本に持ち込まれたと考えられています。日本での古典菊の独自の育成は平安時代から鎌倉時代に逆上ると考えられています。各地に残る系統の中で、花弁が細く刷毛のように立ち上がる嵯峨菊や花弁がちぢれ垂れ下がる伊勢菊は、古い伝統を受け継ぐものとして知られています。また、古典菊の隆盛に大きくかわったのが江戸時代に育成されはじめた、一重咲きで花弁の間がすいた肥後菊や開花からおよそ1ヶ月かけてさまざまな変化をする江戸菊があります。くらしの植物苑では、これら『古典菊』と呼ばれる「嵯峨菊」、「伊勢菊」、「肥後菊」、「江戸菊」を1999年から収集・展示してきました。今年度のテーマとして「育て方と楽しみ方」に即した菊の栽培書や伝統的な花の包み方、当苑での育て方をパネルにて展示しています。

また、「嵯峨菊」、「伊勢菊」、「肥後菊」、「江戸菊」のほかに、青森で改良された「奥州菊(大掴み)」や「丁子菊」も展示しています。



嵯峨菊：嵯峨天皇が好み、離宮(現大覚寺)の大沢池に植えたのがその起源とされる。京都の大覚寺に伝わるものが唯一とされており、明治になるまでは大覚寺のみで栽培され、門外不出とされていた。現在の嵯峨菊のような形態になったのは江戸時代になってからとされている。花弁が細く刷毛(はけ)のように直立するのが特徴



伊勢菊：伊勢神宮の斎王や女房たちが京の都を懐かしんで取り寄せたといわれ、室町時代に伊勢の松坂地方で嵯峨菊から改良されて誕生したものと考えられている。伊勢の「狂い菊」とも呼ばれていた。垂れ咲きが特徴で、独特な垂れ咲きは江戸時代に改良されてできたとされる。



肥後菊：宝暦年間(1751～1763)に肥後の藩主細川重賢公が文化政策の一つとして始められたと伝えられる。文政2年(1819)、肥後菊中興の祖とされている肥後藩士別当職秀島七右衛門が栽培法をまとめて「養菊指南車」という著書をあらわしてから独特の栽培法として広く知られるようになった。花は、一重で、花弁の間がすいたものが多いのが特徴で、花弁の形は平弁・管弁・匙弁の三種類がある。花の大きさは大輪で直径20センチ・中輪が8センチ・小輪は5センチくらいである。



江戸菊：寛保年間(1741)から江戸を中心に育成されていましたが、現在に受け継がれている花形が成立したのは文化・文政期とされています。「江戸の中菊」・「狂い菊」・「芸菊」・「抱え菊」・「正菊」などたくさんの異名があり、近年「江戸菊」という名称に統一されました。花の特徴は、初めの10日くらいで咲き開き、次の10日で順次抱え、最後の10日で完全に狂って観賞の好期となります。この様相を昔は「三態の眺め」と呼んでいました。